

# 日本の歴史 8

情報サービス課 稲垣 宏行

『島原の乱：キリシタン信仰と武装蜂起』 神田千里 著（中央公論新社）252p. 18cm

徳川政権初期の衝撃的な出来事の一つ、島原の乱。戦の発端は島原・天草における苛烈な徴税やキリシタン弾圧にあるという見方が一般的ですが、果してそれが最大の原因なのでしょうか。著者はこのような見方のみならず、長い年月の間に作られてきた「敬虔なキリシタンの殉教戦争」というイメージに疑問を呈しています。

著者は、この戦の最大の目的がキリシタンの容認にあったと主張しています。しかも、そのために他ならぬキリシタンたちが武力で民衆に信仰を強制していたという例を挙げています。島原の乱以前に有馬晴信・小西行長らキリシタン大名が、領国内で一向宗など日本の伝統的な宗教を弾圧していたという事実も見逃せません。

著者が警鐘を鳴らす一元的な見方から判断する歴史観は、島原の乱に限らず人類史上の様々な出来事にも共通して見られるもので、本書は歴史を通して正しい物事の見方を示唆してくれます。

210.52-Kan

『吉田茂：尊皇の政治家』 原彬久 著（岩波書店）241, 7p. 18cm

吉田茂。彼は歴代首相の中でも個性的な人物の一人として知られています。父である竹内綱も、幕府が禁じていた洋酒を飲んで咎めを受けたという風変わりな逸話を持つ人物として紹介されています。そして吉田自身もそんな父の性格に少なからず影響を受けたと言います。吉田に関する面白い逸話や発言は、本書でもいくつか紹介されています。「総理秘書官は勤まりませんが、総理なら勤まります」と戦前に仕えた寺内正毅首相に返答した言葉などは、個性を表す代表的な一例ではないでしょうか。

しかし、本書でもう一つ注目すべきところは、彼がイギリス大使などを勤めた国際派としての観点から、太平洋戦争中は反戦和平派の立場を貫く一方、「尊皇」という一面も持っていたという点です。特に、日本国憲法制定に携わる以前までは「祭政の中心は皇室」と言った言葉が示している様に、その一面を如実に示す吉田の言動や振舞いは本書でも随所に見られます。

たとえ周囲の輿論を買おうとも、自らの信念を貫き続けた吉田茂。本書ではそのような彼の姿が生生きと描写されています。

289.1-Har

『山内一豊と千代：戦国武士の家族像』 田端泰子 著（岩波書店）ix, 254, 3p. 18cm

山内一豊は、戦国時代においてあまり有名な武将ではなかった様です。当時記された『信長公記』にも彼の名前は登場していません。しかし、一豊が厳しい時代を切り抜け、土佐一国の藩主としての基礎を築いたことは事実で、そしてその陰には、妻の千代の尽力があったことが本書に記されています。

千代は、一豊のために持参金で良馬購入のための工面をしたことなどから「内助の功（家庭において、夫の外部での働きを支える妻の功績）」で知られています。しかし、著者は「内助の功」は家計における働きのみならず、間接的に軍事や政治面でも優れた働きをしていることを意味していると解釈しています。また、一豊・千代の関係は武家を維持していく上で「対等」であり、それは「戦国時代の典型的な夫婦関係」であったとも述べ、「妻」の役割の重要性を強調しています。テレビで放映されている間にご一読されてみてはいかがでしょうか。

289.1-Tab



いながき ひろゆき（係）